

第四十三章  
有識者委員会

「こちらの会場では税制改正の委員会が開かれています」  
テレビカメラがドアから着席している人々を映している。

「この方は経団連の会長。この方は大蔵省の主計局長。そして国税庁長官。税理士会会長。総務省の地方税担当の局長。官房長官。知事会会長。東京大学名誉教授……」

田中や両大家にはなじみのない顔ぶれが多い。

「税目に分かれて小委員会が設けられています。本委員会の開催後、小委員会が開かれます」  
画面が変わる。

「こちらは消費税の小委員会。この方は国税庁の消費税課長。百貨店協会の副会長。税関局長。京都大学の教授。大手財務ソフト開発会社の社長。消費税に詳しい税理士……そして消費者庁の長官」

質素な服の大家がうなる。

「肝心の消費者そのものの代表はいないぞ」

「よく気が付かれましたね」

いつの間にかテレビの中に戻った山本が微笑む。

「消費税の納税者は最終消費者です……」

山本が説明を続けようとするが、山本に褒められた質素な服の大家に對抗するように立派な服の大家が遮る。

「その最終消費者は納税者じゃが、消費税の申告義務はないのじゃ」

田中が驚く。

「えー。何かおかしいな」

「物を買ったときにいちいち消費税の申告をしなければならぬとすれば大変なことになるのじゃ」

「確かに。でもなぜ？」

「うーん」

理屈は理解しているが、立派な服の大家にはうまく説明できない。代わりに山本が答える。

「簡単に言えば、メーカーや販売者、いわゆる業者が、最終消費者が支払うべき消費税を計算して申告して納税するのです」

「うさん臭い制度だな」

田中が気色ばむが、かみ含めるように山本が続ける。

「たとえばコンビニで100円のラーメンを買ったとしましょう。消費税は10パーセントの10円ですね。次の日にパソコンを10万円で買ったとしましょう。消費税は1万円ですね。

次の日98円のボールペンを買いました。消費税は？」

急に質問された田中は電卓を探す。

「9円と80銭じゃ」

電卓を探すのを止めて田中が山本に尋ねる。

「この80銭は切り捨てするんですか」

「いいえ。ちよつと難しい話になりますが、切り上げも切り捨てもしません。話を続けてもいいかしら？」

質素な服の大家が割りこむ。

「実際、払うときは切り捨てられているぞ」

「確かにそうですが、最終消費者に代わって消費税を納める業者はすべての取引から生じる消費税の端数は切り捨てても切り上げも四捨五入もせず集計します」

「うーん、よく分からない」

「話を進めましょう。次の日、1円セールがあつて、ある商品を1円で買いました。消費税は？」

「10銭」

「次の日には998円のシャツと1768円のパンツを購入しました」

「高いパンツだなあ……エーツと998……」

いつの間にか電卓を手にした田中が答える。

「276円60銭」

「次の日には……」

「もう勘弁してください」

田中がべそをかくとたまりかねて山本が大きな声で笑う。

「電卓を使うほどではないと思いますが、こんな計算を一年間続けて消費税を納めるなんて不可能ですよね」

「子供も年寄りも、つまり全国民がこんな計算をして税務署に申告すれば大混乱だ」

「端数まで集計しなければならぬとしたら大変でしょ」

「なるほど。そうなんだ。税務署も消費者全員が正確に申告しているかどうか、そして申告どおり消費税を納めているかチェックすることはできないなあ」

「消費税は物を買うときに知らないうちに取られる税金だと言うことじゃ」

「消費者に代わって事業者が消費者から預かった消費税を申告して納税するのです」

「うまい仕組みですね」

「感心してもらっては困るわ。消費者はちゃんと消費税を上乗せして支払っているのに最悪の場合事業者が申告せずに猫ババすればどうでしょうか」

「そんなこと絶対に許せない！」

いったん感心した田中がわめく。そんな田中を無視して両大家が山本を見つめる。

「色々な税金の委員会がありますが、特に消費税の増税を検討する委員会には本来の納税者である消費者が参加していません」

「消費者庁の偉いさんが参加していると山本さんが言ってたが、消費者の代表者ではないぞ」

「庶民は有識者ではないから委員会には参加できません」

\*

「日本の法人税率は世界的に見て高いから下げると法人税小委員会では経団連などが強いクレームを政府に突きつけています。本当に法人税率が高いかどうかは別にして、税率を低くしても消費税率が高ければ物は売れません」

「それじゃ、消費税率の低い日本では法人税率を低くしなくても、逆に消費税率を下げれば物が売れて、少々高い法人税を払ってもいいんじゃないですか」

田中の疑問に山本が首を横に振る。

「それがそうも行かないのです」

すると立派な服の大家が割りこむ。

「なぜじゃ」

「それは世界がグローバル化しているから消費税の高い国に物を売るには国内の法人税が高ければコスト競争に勝てないからです」

「TPPとか自由貿易協定だとか、世界中の庶民が分からないうちに奇妙なルールを作ること  
にエネルギーを掛けずに、法人税率の引き下げ競争を止めて全世界の法人税率を統一すべきじや?」

山本が答えようとすると質素な服の大家が疑問を投げる。

「日本の消費税率は世界的に見て低い。低いほどモノが売れると言うのなら、なぜ世界中で消費税の引き下げ競争が起こらないのだ！」

「それは消費税率を上げるときにだけ起こる現象だからです」

「うーん」

質素な服の大家が一瞬考え込むが、すぐ納得する。

「いくら食いだめしても次の日には腹が減る。始めは安い物を食べようとするが、しばらくするとついつい美味しい物に手を出してしまう。いつの間にか新しい税率になれてしまうものだ。そのうちいつ消費税率が上がったのかも忘れてしまう。結構な税金だな」

「話を戻してもいいでしょうか」

落ち着きを取り戻した質素な服の大家の顔を伺うと頭をさする。

「ところで何の話をしていたんだっけ」

「全世界の法人税率を統一できないのかという話です」

田中が首を傾げる。

「そんなこと、できるんだらうか」

「それぞれの国の中でできてから、不可能ではないぞ」

「東京の法人税率と北海道の法人税率は同じはず」

「全国どこで物を買っても消費税率は同じじゃ」

「全世界に通用するルールを作るのにどんな障害があるんだろうか」

ここでテレビの電源が入って逆田が割りこむ。

「まず『税金とは何か』という本質を明らかにする必要があります」

「なんだか難しい話になってきたな」

田中が尻込みすると山本が微笑む。

「軽く考えましょう」

「なぜ税金というシステムができたんだろう」

早速、立派な服の大家が発言する。

「戦争するためには金がいる。それを集めるために税金というものを考え出したのじゃ」

質素な服の大家が追従する。

「病人の、老人の、失業者の、親を失った子供の、というような困った人たちの生活を守るためにと言うことで税金のシステムができたとは考えられんな」

「今でも国防という大義のもとで税金を取っておる」

「天災にも備えなければならぬわ。道路や橋やトンネルの修繕、それに原子力発電所の廃炉にも税金が必要だわ」

「教育にも税金は必要じゃ」

「仮に全世界がひとつになって地球連邦政府ができて、連邦諸国、つまり今の国々の事情に



応じて全世界から集めた税金を公平に全人類に配るのは大変な作業になる」

「公平に税金を集めたとしてもそれを公平に使うのはもっと難しい」

「今でさえ、難しいのにまず無理じゃ」

「やっぱり無理か」

田中が気落ちすると山本が楸を飛ばす。

「手をこまねいては前に進まないわ」

「この地球を強い意志で引っぱる指導者が必要だ」

「強い意志を持つ指導者は往々にして独裁者になる可能性が高いぞ」

「自国の利益だけを、と言うより自分の地位を守ることを優先させるための指導者は独裁者だが、地球人を指導する者は独裁者じゃない」

「火星人や木星人が反対することはまずないわ」

田中が山本に同意しながら続ける。

「間違いないのは地球の環境がこれ以上悪化すると人類は自滅する可能性が高いということだ」

「攻撃しなくても自滅してくれれば火星人は喜ぶのかしら」

「つまらないたとえ話は止めてくれ」

立派な服の大家が山本にクレームをつける。

「そうかしら」

山本がくるっと上半身を回すと立派な服の大家を見つめる。

「私は月人や火星人のような視線で地球を見つめる必要があると思います」

「視点を変えて利害関係を超越しなければ」

田中が山本をかばう。

「これまではエネルギー資源を巡って戦争ばかりしてきたわ。国連を通じて調整を試みましたが、結果はそれ以上というのではなく、それ以下が多かったわ」

「今まではそうだった。でも国連は変わりつつある。事務総長を支える鈴木とチェンという実務総長がいるぞ」

質素な服の大家のポジティブな追い風に田中が乗る。

「国連ではあらゆる国が平等に一票を持っている。どんな議案に対しても参加できるし、平等に一票を投じることができる」

「それに引き替え、政府が主催する有識者委員会は参加者の選定基準はないし、最大の利害関係人を単に『有識者ではない』という無茶苦茶なルールで閉め出して奇妙な採決をするぞ」

質素な服の大家の意見に山本が興奮する。

「そうです！ 有識者だけが参加できる委員会なんて出来レースみたいなものだわ」

「ほー、議論が元に戻った！」

立派な服の大家が議事進行役に回る。

「委員会に参加する人の選定方法は裁判員制度のように無作為抽出すべきではないかと思う」  
「有識者、つまり専門家でないと議論が出来ないということはない。庶民は立派に裁判員を務めておろぞ」

先ほどまでの興奮を一気に昇華した山本が熱弁を振るう。

「今までのやり方がまったく悪いとは言いません。うまく言った場合もあります。かといって有識者と言われる人々の提案どおりにうまくいかなかったことも多々ありました。でも彼らは責任を持たないばかりか沈黙するだけ。マスコミの追求もその場限りですから、世間が忘れた頃に再び有識者として委員会に招かれる。政府もどの有識者が誤った提案をしたのかチェックしていないから手なずけた有識者を再び採用する。採用ルールを作る気がないのなら、無作為で無識者、失礼！ ごく普通の庶民が委員会に参加して素朴な意見を基礎に政策提言することが重要だと思おうわ」

\*

「結局、今回の消費税率引き上げを検討する税制委員会に最終納税者の庶民はひとりも入らなかったなあ」

田中が残念がると興奮を抑えるためにトイレに行った山本に代わってテレビの中の逆田が発言する。

「今回は新しい税率での店頭表示価格をどうすれば『見やすくできる』のか。つまり消費者視

点で考える問題もあるのに、税率を上げる前提でどういう表示にすれば『国民に消費税を理解させることができる』のかという高所からの発想だから庶民の意見を聞くことはない。政府は『我々も個人的には消費者ですから国民の視点はよく理解しています』と言うが、彼らは給料を国から貰っている限り自分たちが利害関係人であることを忘れている。平たく言えば目が曇っているのを自覚していない」

ここで逆田が田中たちの理解度を確かめるために言葉をいったん句切ったあと一息入れて続ける。

「原子力発電所のメルトダウン問題で専門家というものがいかにかにいい加減かよく分かったはずなのに、被害者の声を聞こうとしないだけならまだいいが、『なるほど』と納得できないことばかり言う。税金も同じ。選挙権がない会社や団体の代表者を委員会のメンバーにするのはおかしい」

田中が質問する。

「先ほども議論したようにそんなに重要な委員会なら公募にすべきでは？」

「それに『何月頃までに提言をまとめろ』なんて、半年以上も先の日付を指定する。それこそ専門家が集まれば徹夜してでも一週間やそこらで重大な提言をまとめなければならぬのに、しかも専門家を自負する集団なのにさっさと行動しない。国民をバカにするのもいい加減にしろと言いたい」

興奮した逆田の言葉を受けて立派な服の大家が割りこむ。

「しかも有識者は忙しくて委員会に出席する日程調整が難しいとぬかす」

「じつくりと腰を据えて議論して提言をまとめなければならぬから忙しいという有識者は最初からメンバーから外すべきじゃ。それほど重要な委員会なら忙しいという言い訳をすべきではない」

「一步譲って長い期間をかけるのなら、一ヶ月ごとに第一次提言、第二次提言というように、その都度議論しまとめたことを公表して国民の反応を確かめるべきだわ」

「ひよっとして庶民の声なんか聞きたくないのでは」

田中が議論を横道に誘う。

「僕なんか、誰からも『景気をどう思う』なんて聞かれたこと、ない」

「わしもだ」

質素な服の大家も同意する。

「わしはよく聞かれる」

立派な服の大家が胸を張る。

「金持ちでないとか、聞いてくれないのか」

「国会でよく『国民の生活ぶりは……』なんて議員が発言するけれど、ほとんどが後援会の人たちから聞いた話ばかりだわ」

「マスコミがときどき『街角で聞きました』なんてやってるけれど、余りピンとこないな」

「委員会は次のステップに進むためのセレモニーじゃ」

「結局、提言の責任を有識者が負うこともないし、ましてや政府は委員会の提言を逃げ口上にするだけか」

第四十四章  
戦争大河ドラマ

「先人たちの数々の苦労があつたから今の選挙制度ができたのじゃ」

立派な服の大家に質素な服の大家が大きく頷く。

「普通選挙制度……。この意味、分かるか？」

質素な服の大家が田中に尋ねる。

「成人になれば男女問わず選挙権があるということですね」

立派な服の大家が引き継ぐ。

「この制度を獲得するために流れた血は想像できないぐらい多いのじゃ。だいぶん前に『大河ドラマ』で、男に限ってだが選挙権を認めさせようとして暗殺された明治時代の指導者の活動を見たとき思わず涙が出た」

「それなのに今の国民は選挙に行く人が少ない」

「それは投票したい人がいないからじゃ」

「一票の格差が大きいのも原因の一つでは？」

「普通選挙制度ができたときより、今はひどい状態になっておる。先人の苦労を思い出せば定数は正をして一票の格差をなくさなければならん。ところで『大河ドラマ』を見たことがあるか」

質素な服の大家が話題を変える。

「大河ドラマって毎週日曜日の夜に放送しているJHK（準国营放送会社）のドラマのことで



すか」

「そうじゃ」

立派な服の大家が不思議そうに田中を見つめる。

「田中さんは見ていないのか」

「ときどきチャンネルを変え忘れたときに見る程度です」

「視聴率の高い豪華歴史番組だぞ」

「歴史？ 歴史ドラマなんですか。僕はてっきり戦争ドラマだと思っていました」

この田中の言葉に両大家がハツとする。

「そういう感想を聞いたのは初めてじゃ」

「たまたまかも知れませんが、殺し合いの場面が多いので……余り見たことはありません」

「なるほど。確かにそのとおりだ。様々な人間模様を織り込んではいるが、戦争映画と言われ

ればそのとおりじゃ」

「いつも庶民が犠牲になるだけで戦<sup>いくさ</sup>を指揮する大将やその周りの人々の喜怒哀楽を見せられ

ても余り感動しません」

「しかし、見応えあるぞ」

田中が首を傾げる。

「そうでしょうか。仮に歴史ドラマだとしても本当に史実を忠実に再現しているのでしょうか。

ましてやその時代の底辺で暮らす庶民のことを」

「うーん」

両大家が唸る。

「そんなに深刻にならないでください。たかがドラマなんですよ」

それでも両大家は腕組みをして目を閉じてしゃべらない。

「僕はその前の『生き物、万歳！』という番組が大好きです」

「知っているぞ」

質素な服の大家が沈黙を破る。

「あれはいい番組じゃ」

立派な服の大家と質素な服の大家が顔を見合わず。

「動物や植物が子孫を残すために必死に生きている映像に感動する」

質素な服の大家に田中の気持ちが高ぶる。

「天敵に立ち向かう親、我が身を犠牲にしても子を守ろうとする親。子を励まして餌のあるところへ必死に誘導する親。集団で仲間の被害を最小限にしようと知恵を絞る動物。どのようにしてあんな映像が撮影できたのかといつも感動します。その番組のあと電源を切るのを忘れてときどき大河ドラマのさわりを見ることがあります」

「確かに理屈抜きで動物は自分の子を守る。しかし、人間は果たして……」

「動物の戦いには道理があります。もちろん仲間同士で戦うこともあるでしょうが、そこには種を守らなければならぬという絶対的な義務があると思います。でも人間はどうでしょうか。『大義、大義』と格好つけて人間同士で戦います」

再び両大家が黙る。

「動物が戦う相手は基本的には他の動物、特に天敵です。戦うだけではなく戦いを避けて逃げて隠れたりします。しかし、人間の天敵はあろうことか人間。そこには他の生物のように『子孫を残すため』という大義は見えません」

両大家が大きく頷く。

「時代が現代に近づくにつれ、戦争は規模が大きくなって凄惨じゃ」

ようやく立派な服の大家が口を開くが、田中がとどめを刺す。

「JHKはなぜ原爆が落とされた先の大戦末期を描いた大河ドラマを制作しないんだろう」

両大家が交互にため息をつく。

「大河ドラマと名乗る限り絶対避けられないテーマじゃ」

「準国営放送会社のJHKにはできんだろうな」

「なぜ！」

「政府が横槍を入れる可能性が高い」

「なぜ！ 報道の自由があるはずです。それに被曝した日本人しか作れないはずのテーマじゃ」

ないですか！」

「報道の自由と言うより、言論の自由だな」

質素な服の大家が取り敢えず田中の前半の意見に異議を入れると立派な服の大家が後半の意見に応じる。

「目を背けるシーンに視聴者は耐えられんのじゃ」

「見るに堪えない残酷なドラマやアニメがいくらでもあるのに」

「それは仮想の世界だからじゃ」

「でも、そんな番組の影響で残酷な殺人事件が多発していると……えーとこのテレビの……逆田さんが元警部をゲストに迎えて問題提起していた」

「わしも覚えておる。あれは確か『第一編の第17章未成年者殺人事件』に詳しく載っているぞ」

「バーチャルな世界だという理由で残酷なアニメが許されるのなら、原爆投下時の大河ドラマを制作し放映すれば視聴者は真剣に見るかも」

「なるほど。田中さんの言うとおりかも知れん」

「それに原爆を投下したアメリカ自身が『広島』をテーマにした原爆の映画を作りました」

「それは知らなかった」

両大家が肩を落とす。

「その原爆投下で敗戦を迎えたあと、戦争中、不遇な境遇にいた政治家や若い官僚は必死に日本を立て直そうと頑張りました」

テレビには逆田が現れて山本とともに映像を駆使して戦後の日本の姿を解説する。

「そして戦後一〇数年経つと『もはや戦後ではない』と政策を方向転換しました。驚異的な成長を続ける日本経済に誇りを持つことを否定するつもりはありません。でも『誇り』が『奢り』に変化したことに気付かずにやがて政治家や官僚は利権を取り込むことに奔走し始めました。そこで国民はそんな政府と決別して自分たちで今後何をすべきか考えました。その結果、無謀な戦争を仕掛けた旧政府に対して抱いた同じ感情を持つようになった。つまり、時代が変わろうと政治家や官僚は信用できない存在だと考えたのです」

田中が先回りして自分の考えを吐露する。

「流血の犠牲の上に獲得した選挙制度なのに、なぜ棄権するのかよく分かった」

その田中を見て両大家はもちろんテレビの中の逆田や山本が驚く。田中はその反応に忠実に応える。

「ある大臣、首相も経験した大臣が民主主義の極みとまで言われたワイマール憲法をいつの間にかナチス憲法に変えたその過程を勉強して日本の憲法を改正したらいいのでは、と言ってましたね」

田中が解説者のお株を奪う。

「まあ、そんな薄っぺらい人格の政治家だから偶然首相になっただけ。だから一年も保たなかった」

逆田が解説者の立場を田中から取り返す。

「その政治家を弁護するつもりはありません。でも戦後苦勞して勝ち取った民主的な選挙制度をもっと公平な制度に変えて選挙権のない子供が見ても『なるほど』と納得できる制度に昇華させなければなりません」

第四十五章  
インフレ

「国連の業務で忙しい鈴木一佐に代わって、『インフレ、インフレ』と首相に復帰した安倍野首相が盛んに発言しているけれど、僕には物価が下がるデフレの方が居心地がいい。誰もが首相の言うことに疑問を持っているのでは？」

「肯定も否定もしません」

賛同して貰えるものと思っていた田中がテレビの中の山本に抗議するような目線で続ける。

「景気をよくするために、とか言ってますが、物価が上がれば僕は節約します。我慢します」

ここで山本が田中に微笑みかける。

「賛成！ 給料がインフレになって上がるのならいいのにね」

「そうそう。待てよ。僕は給料を貰っていない。大家さんに面倒を見てもらっているだけの失業者だ」

話の腰を折られた山本の頬がぶくつと膨らむ。

「私が言いたいのは、インフレにすべきは給料で、物価ではないと言うこと」

「賛成。絶対賛成。増えた分で安くなったモノを買う。そうすれば景気はよくなる」

意外な話題に両大家がキョトンとしながらも賛同する。

「確かにそうだ」

「じゃが、一国の首相がそんなことも分からず『インフレ、インフレ』と叫び回っているのはそれなりの理由があるのじゃろ」



すぐ逆田が解説する。

「それはこういうことです。まず物価を上げてモノを高く売れるようにする。そうすると企業の利益が増える。増えれば給料を上げることができる」

「ちよつと待った」

質素な服の大家がテレビの前に立ちはだかる。

「物価を上げれば売ろうとするモノの仕入価格も高くなる。高くなったモノを高く売っても利益は上がらんぞ」

「そうか」

田中が頷くと立派な服の大家が反論する。

「でも円安だから外国に高く売ることができる。国内で儲からなくても輸出関連の会社は儲かるのじゃ」

すぐさま質素な服の大家が反論の反論をする。

「円安で原材料の輸入価格が高くなるからやっぱり儲からんぞ」

「うーん。どっちの話も一理あるなあ。僕には分からないけれど最近高級品が飛ぶように売れているという報道が多い」

「それは一部の国民だけだぞ」

「そこなんじゃ。全国民がハッピーならわしの理屈が正しいことになるのじゃが」

「ところで始めの話、覚えてますか」

山本が話を戻す。

「インフレにするのなら給料だ、という話？」

「そうです。もし給料を上げることができれば、みんなハッピーになるはずですよ」

「失業者も？」

「給料が上がると言うことは景気がいい。つまり人手不足になるから失業者も減ります」

「そうか」

「でも企業の利益が増えないと給料を上げるのは不可能じゃ」

「円安も円高も給料には何の影響力もない」

「むしろ円安でエネルギー価格が上がって電気代やガソリン代が増えて困っている人が多い」

「なんとか給料をバーンと上げる方法はないものかしら」

「ここで質素な服の大家が大声をあげる。

「あるぞ！」

テレビの中から山本が首を出して質素な服の大家に注目する。

「今、一番お金を使わない人が数多くいる地域がある」

「地震や原発事故で苦しんでいる被災した地域のことですか？」

\*

「そうだ。そこに住んでいる人、住んでいた人に消費してもらおうということじゃな」  
立派な服の大家がヒザを乗りだす。

「要は消費したくても消費できない人にお金を使ってもらおうようにすればいい」

「金をばらまくのか」

「そうだ」

全員、質素な服の大家に首を傾げる。

「震災復興予算を見ろ。使い切れないどころか、一部は復興と関係がない使い方をしている。それを寄せ集めてそれこそ被災者に支給するのだ」

「そうか！ わしも賛成じゃ」

「バラマキは悪いとよく言われるが、こんなバラマキなら大賛成」

田中も同調する。

「原発事故の補償もままならないから、みんな助かると思うわ」

山本までが賛成に回るが、すぐ表情が暗くなる。

「でも……全国から集まった寄付金のときもそうだったけれど、お金を配るのは難しいわ」

「確かに被災した人の手元に届くように、しかも二重支給がないように、それに本人かどうか確認するのにとつともなく時間がかかるなあ」

田中が以前山本に聞いた話を思い出して落胆する。しかし、急に大きな声を上げる。

「なぜ全国から集まった寄付金を迅速に被災者に届けられなかったか。それは未曾有の大震災で混乱していたからで、落ち着きを取り戻した今ならなんとかなるかも！」

「そうね！」

山本の顔がパツと明るくなる。

「ところで被災者にお金を渡すのは誰にさせるのじゃ」

「国に、官僚に、いや現場の役人にさせればいい」

田中が提案する。

「何を言っとる。復興予算をねじ曲げて関係のない事業に流用する官僚や役人にこんな重要なことを任せる訳にいかんぞ」

「それにバラマキは政府の得意とするところじゃ。わしも反対じゃ」

両大家が揃って反対する。

「だから任せるのです」

「？」

「彼らはバラマキのプロです」

「なるほど！」

山本がテレビの中で飛びあがって笑う。

「今度こそ、プロの腕を見せてもらいましょう！」

「着服したり、特定の人にだけばらまいたりしたら、即刻首にすればいい」

質素な服の大家が田中の肩を叩く。

「すごくいいアイデアだぞ。わしは田中さんを見直したぞ」

「えっ？ 今まででは？」

「前から言っておるぞ。わしには田中さんだけが頼りだ。その田中さんがこんな素晴らしい発想をした。わしや、ますます田中さんのファンになるのだ」

「このアイデア、キャンペーンを張って大々的に報道するわ」

「興奮するのもいいが、少し冷静になった方がいいのでは？ 世の中は甘くないのじゃ」

立派な服の大家が冷や水を浴びせるが、山本が画面から出てきて田中を抱きしめる。

「被災地の人に大々的にお金を使ってもらおうのよ！ それでインフレになるのなら大歓迎だわ。

このアイデアに首相が反対することは絶対ないわ」

田中が大声を張りあげる。

「インフレ、万歳！」

## 第四十五章 インフレ

第四十六章  
目覚めた公務員

給料やボーナスを減らされて退職金もカットされた公務員がついに立ち上がった。政府の意に反して被災者側に立って復興予算をばらまく。被災地の地方公務員だけでなく、その活動と住民の熱烈な感激が、被災地以外の地方公務員まで動かす。

補助金は公平、適切に、しかも迅速に被災者や本当に生活に困窮している住民に給付された。そして不正受給者を摘発して公平に執行される。これまでと違って行政が信じられないほど効率化した。歯車がかみ合って前に進みだすと事態は好転する一方で住民もポジティブに行動するようになった。そのような具体例が次々とテレビに映される。

「目覚まし時計が鳴ってもなかなか起きなかつたのに、時計が鳴る前に起きて今日もいい日にしようと頑張っているように見えませんか」

山本の声がテレビから漏れると田中が応じる。

「公務員が本気になって仕事をすればすごいな。役所に勤めたら休まず遅れず働かず……なんて言っていたから、適当な人が就職していたと思っていたけれど、本当は優秀な人が集まっていたんだ」

「この前も印鑑証明書を取りに行ったら『大家さんですね。今日も暑いですね』と声をかけられた。おもむろに身分証明書を出そうとすると『私は何度も大家さんにお会いしてます。本人確認は不要です。すぐ証明書を発行しますから、しばらくお待ちください』なんて言われて恐縮したぞ」



「じゃが、銀行の窓口は相変わらず本人確認が厳しい」

立派な服の大家が質素な服の大家に首を横に振る。すぐさま質素な服の大家が続ける。

「確かにそうだ。そのことを役所の窓口で言うと『私は大家さんの顔を見て本人確認済みと申請書類に書きこみます。すべての住民の顔と名前を覚えるのは不可能ですが、よく来られる方の顔と名前を覚えることは市役所の職員の義務です』と言われた」

「でも、申請書類に免許証のコピーを貼り付けておかないと、本人確認チェック担当が文句を言うんじゃない？」

「そうではない」

田中と立派な服の大家が首を傾げる。

「今はコンピュータの時代だ」

意外なセリフに田中が目を丸くする。

\*

「お待たせしました。三五番の札をお持ちの方、三番窓口にお越しく下さい」

質素な服の大家が立ち上がるとくたびれた鞆を持ってカウンターに向かう。

「質素な服の大家さんですね。お名前でお呼びしてもよかったですですが、差し障りがあるかも知れないと番号でお呼びしました」

カウンターの途中で若い女性の職員が頭を下げると笑顔を上げる。

「印鑑証明書を二通ですね。一通五百円です。二通で千円」

「しまった！ 支払いは印紙だったのう。印紙を買ってくる」

「いえ。ここで現金でお支払いください」

「えーと」

質素な服の大家が鞆を開けて財布を取り出す。

「千円、千円。ないなあ。一万円札でお願いできるかな」

「分かりました」

一万円札を受け取ったその職員が横にある読み取り機にお札を入れると、出てきたお釣りの九枚の千円札を確認して手渡す。

「まるで銀行みたいだな」

『「ここ」で印鑑証明書を手渡してあっちで支払え』というのが今までの市役所のやり方でした。

市長が『市民をお客様だと思つて事務をしろ』と言うので、このようになりました」

「最近、市長の評判は悪いが、やるべきことはキチンとやっているんだな」

「ありがとうございます。またのご利用をお待ちしております」

「ちよつと待った」

質素な服の大家は手続き待ちの人がいないか後ろを気にしながら尋ねる。

「本人確認は？」

「質素な服の大家さんの場合、要りません」

「仕事の邪魔をして悪いが、なぜだ」

「前回の記録がコンピュータに残っています。請求に来られた年月日、時刻、対応窓口番号、対応職員名などです。前回も私でした。そのときに本人確認をしています。あとで本人確認をしたかどうか検査されても、前回の資料を今回の申請書に電子コピーしますので問題がないのです」

「電子コピー？ まあ、いいか。とにかく市民の負担が減るし、効率的だな」

「今まで非常にご不便、ご迷惑をおかけしましたが、これからは違います。市役所の職員全員の意識は変わりました。今後も当市役所を徹底的にご利用くださいますようお願い申し上げます」

その職員は立ち上がると深々と頭を下げる。

\*

「むしろ気持ち悪かった」

立派な服の大家がいったん言葉を切った質素な服の大家に疑いの視線を向ける。

「お前、騙されたんじゃない？」

「そんなことはない。なんなら、今から印鑑証明書を取りに行けばいい」

「冗談、冗談」

立派な服の大家が詫びると質素な服の大家が気にせず続ける。

「そのあと、わしはその印鑑証明書を持って銀行に行った」

「借金か」

質素な服の大家が素直に頷く。

「ところで借入の様々な手続きの中で必ず本人確認があるのだ。もちろん、席を立つ訳ではないから確認は一回だけだったが……」

「そりゃ、そうじゃろ」

「ところがだ。同じ担当者が振込の手続きでわしを窓口に連れて行った途端、そこで本人確認を求められた。当然クレームをつけた」

「銀行員は慇懃無礼だ。幸いわしは借金していないからいいようなものの、借金している者は大変じゃ。銀行員の一言で自殺した者をわしは何人も知っておる。一方、当の銀行員はシャーシャーとしておるのじゃ」

質素な服の大家が立派な服の大家に頷きながらも手を上げて言葉を遮断する。

「だからその銀行員に市役所の職員の対応を披露した」

田中が合いの手を入れる。

「それで」

「こう、のたまいおった。『彼らは気楽な公務員です。しかし、私どもは何かあったら大蔵省

や金融庁からお叱りを受けます」と

いったん言葉を止めてから質素な服の大家が続ける。

「だったら、『お叱りを受けない対策をすればいいのでは?』と提案したが、答えずにただ笑っていた」

画面には変身した公務員の活躍と違和感ある民間会社の対応の様々な映像が流れる。

「意外だ」

そして引き続きテレビには許認可が必要な業種、つまり銀行、証券会社、保険会社、電力やガス会社、マスコミ関係の会社……その類いの会社の様々な対応姿勢の映像が流れる。明らかに市役所の対応に比べて見劣りする。そして逆田の興奮した声が流れる。

「要はキチンと信頼関係が保たれていればルールは不要です。ギスギスした世の中になったから世知辛せちがらくなった。そのようなことに気付くこともなくチェック体制の強化に奔走した政府自体が人間関係を不安定化させた。その原因は政府の保身です。さらに政治不信がそれを加速させた。一旦立ち止まって何故そうなったのか検証もせずこれまでより厳しいルール作りに邁進した。この悪循環を断ち切ろうと選挙で新しい政権が誕生したが、その政権は悪循環を断ち切るチャンス逃したただけではなく、こともあろうかこの悪しき循環を温存した。しかし、我が市の市長はこの悪循環を断ち切った」

政権を取られた前与党が政権に返り咲くと目先を変えたが本質は変わらない。いったん新た

な政権に協力した高級官僚は復帰した与党との付き合いに神経を使う。しかし、そんな高級官僚を尻目に公務員、つまり下級官僚が立ち上がった。

その結果は冒頭のごとくだった。

\*

「公務員と言えば、税務署員は税務署を退職しても再度税務署に雇用してもらおうようだ」  
質素な服の大家の発言に田中が反論する。

「税理士にならないのですか」

「このテレビでもそんなことを放送していたな（「第二編第二十八章キャリア」参照）」

「思い出しました。昔は退職したら国税局が顧問先を斡旋していたけれど、世間の批判に耐えきれなくなつて、この斡旋制度を廃止したのだと」

立派な服の大家が合流する。

「自分で顧問先を探すのは難しいからじゃ。民間の会社に定年延長を推進している政府としては自らも定年延長をせざるを得なくなつたのじゃ」

「ふーん」

と言いながら田中がテレビを見つめる。

「大概、ここで電源が入るのに……」

プツンと電源が入ると画面に山本が現れる。

「ご要望にお応えしました。ところで立派な服の大家さんの定年延長説は間違いです」

「わしも自信があつての発言ではない」

「定年延長ではなく再雇用です」

「うーん。定年延長と再雇用というのはどこが違うんですか？」

田中が代表して質問する。

「もちろん違います。定年延長はその組織の全員に適用されます。定年を六十歳から六十五歳に変更すれば全員六十五歳まで働くことができます」

質素な服の大家が質問しようとするが山本に遮られる。

「あくまでも一言で説明すればと言うことで細かいことは説明しません。と言うより知らないのです」

山本が会釈すると続ける。

「一方、再雇用には何歳までという保証はありません。要は一年ごとの更新契約です」

「一年間の働きぶりを見て次の再雇用を拒否できるのか」

質素な服の大家が切り込む。

「公務員の場合、悪いことをしない限り首になることはありません」

『「こいつ、働きが悪いから首を切つてやろう」ということはできないのか」

「そうです。公務員には民間企業のような失業保険制度はありません。もちろん、公務員はな

ぜ失業保険がないのかなんて疑問に思うこともなく給与明細書を見ているでしょうが……」

「そう言えば、給料を貰っていた頃、失業保険料が天引きされていた。金額はわずかだったけれど。でも公務員はいいなあ」

「じゃあ、再雇用になれば失業保険はどうなる？」

「うーん。分かりません。想定外の質問には応えられません」

「マスコミ本来の義務を放棄したな」

質素な服の大家が抗議すると山本の横に逆田が現れる。

「私の監督不行き届き。誠に申し訳ありません」

逆田が頭を下げると山本も頭を下げる。

\*

「もちろん、税理士にもならず、再雇用も申請しないという道があります」

「えー。どうやって食っていくんだ」

自分のことを忘れて田中が驚くと質素な服の大家が続く。

「公務員の場合、退職金や年金が優遇されているからな」

「優良上場企業はともかく中小企業と比べばうらやむほどの退職金や年金を受け取れます。

ボーナスや給料がカットされたと言っても、就職してから退職するまでの生涯賃金はかなり多いのです。要は蓄えがあればあくせく働かなくてもいいのです」



ここで田中が伏線を含めた質問めいた言葉を山本に向ける。

「退職した税務職員は通常再雇用されるか、頑張つて税理士事務所を開くかの、どちらかなのでしょうか、そして働かないという道があるのも分かりました。その他に道はありますか。

あるのなら……」

「あります。と言うより、すごい事をしようと数人の元税務職員が決起しました」

田中が待つていましたと発言する。

「やっぱり！ ひよつとしてブログを通じての税制改正提案のことですか」

「そうです」

山本が消えると見慣れないホームページの画面に変わる。

\*

「税務署退職者連合会」

ゴシック体のしかもモノクロの画面が現れる。

「世界一、ダサイホームページです。今まで納税者の方々をいじめてごめんなさい」  
ただこれだけ書かれたホームページだった。

「なんだ。これは？」

「工事中のようです」

「山本さん！ これを見せるために画面から消えたのですか」

画面から声だけが聞こえてくる。

「これは、以前、知り合いの記者が取材したある元副署長が中心となって立ち上げたホームページです。今度は私が取材しました」

\*

「私は心ある退職者で将来の日本を憂う旧職員を集めて政府はもちろんマスコミに向けて現場から見た税制改正の提言を行うことにしたのです」

元副署長が山本に心境を語る。

「税務署を退官した人は税理士になるケースが多いから、税理士として提言を行うことは考えなかったのですか？」

「ご質問の意味は、今さらなぜ退職者が、しかも税理士事務所を開業しない者が集まって何をするつもりなのかと仰うことですね」

「そうです」

「今、時代はデフレです」

「？」

『いきなり、何を言うんだ！』でしょ？』

山本は頷くだけだ。

「給料やボーナスは減額され、退職金も思っていた額の七割程度。もちろん大企業と比べれば

少ないと言っても中小企業と比べれば高額です。贅沢しなければデフレの時代ですから何とか生活できます」

淡々としゃべる元副署長に山本はなぜか圧倒される。数々の取材の修羅場を経験したはずなのに言葉が出せない。

「国家公務員の人事構成は歪です。むしろインドのカースト制度よりひどいかもしれません」  
ようやく山本が口を開く。

「そんなにひどいのですか」

「はい」

「キャリア制度のことですね」

「そうです。採用試験で将来うまく行けば省庁のトップの事務次官に出世するコースと、出世しても小さな出先機関の長にしかねないコースに分けられています。会社で言えば社長や重役になれるコースと係長止まりのコースに初めから分かれているようなものです。つまり採用時にキャリア組とノン・キャリア組に区別されるのです。そのまま退職まで変わりません」

「採用時に将来が決まってしまうなんて常識では考えられないことですね」

「私が言っているのは大蔵省の人事のことですが、他の省庁も同じです」

「ここで確認しておきますが、キャリア組というのは高級官僚のことです。ノン・キャリア組というのは『下級官僚』……」

ここで元副署長は首を横に振る。

「今思えば、自分たちのこと『下級官僚』と思つたことはないなあ」

「すいません。言葉が悪いですが、世間では『木っ葉役人』と呼ぶ人もいます。特に年配者に多いですね」

「そうですか。残念です。でも、その庶民感覚、素直に受け入れなければならない」

「そのように揶揄やぶされるのは公務員の宿命だと思います」

山本がかばう。

「いいえ。真摯しんしに受け止めてそんな気持ちを抱く国民の誤解を解消すべきです」

「最近、官庁の窓口はどこも親切だという話をよく聞きます。その中でも税務署は断トツだとも」

「ありがとうございます。しかし、これも問題があるのです」

「親切に納税者に接するのが？」

「そうです」

「なぜですか」

「それは国税局長が納税者とのトラブルを嫌うからです」

「！」

想定外の答えに山本が戸惑う。

「最近はインターネットの普及で誰でもネットに投稿して、場合によってはホームページを上させます。そうすると民間企業なら非難を浴びて売り上げに影響します」

「でも各省庁のホームページが炎上したなんて聞いたことはありません」

「それは国家として大恥ですから公表しないのです」

「国税局長というのはキャリア組ですね」

「大きな局はすべてそうです」

「税務署長は？」

「ほとんどがノン・キャリア組です」

「ほとんどというのは？」

「ほんの一握りの税務署に二十代後半のキャリア組が署長として中央から赴任してくるのです」

「待つてください。ノン・キャリア組の職員は出世してもなかなか署長にはなれないんですよ」

「そうです。私も副署長で退職しました。どちらかと言うと出世した方です」

「そんなポストに二十代後半で就任するんですか？」

「あまりにも若すぎて現場が混乱するということで、近々三〇代前半に変更されるようです」

「いずれにしても副署長から見れば子供じゃありませんか！」

「それが公務員の人事です」

「同族会社を除いて民間ではあり得ないわ！ 国家を運営する組織が同族会社と同じなんて信

じられない！」

\*

興奮する山本の横に逆田が現れる。

「大変失礼しました。取材する者が興奮して肝心の質問を忘れてしまったようです」

「いえ、そうでもありません」

元副署長の言葉に逆田が驚く。

「キャリア組は現場を知らない、あるいは現場に赴いても子供ですし無事に本庁に戻ってもらわなければなりませんから大切に扱います。もちろん彼らは税法を知りません。チャホヤされて本当の現場を知らずに大蔵省に戻ります。それでも現場経験をしたことになります」

「そんな！ それじゃ貴重な現場を体験する機会が生かされないばかりか、若いキャリア組にとってマイナス経験になる！」

「昔はそうでもなかったのですが今や税務署長の仕事は激務です。ノン・キャリア組の我々でさえも、できれば署長にはなりたくない。副署長で退職した私はある意味幸せ者です」

元副署長がフーツとため息を漏らす。

「ところがやがて国税局長として、たとえば関西であれば近畿国税局長、東北大震災の地域なら東北国税局長として、そのエリアの税務署を管轄する局長になって赴任します。局長の責任は税務署長の比ではありません。そうなると今度は自分に責任が及ばないように保身する。そ

んな局長ですからノン・キャリア組の税務職員はバカ殿に仕える哀れな公務員です。逆説的に言えば局長は裸の王様です」

「迫力ある言葉に逆田も、もちろん山本も狼狽える。

「さて、そろそろ、本題に入りましょうか」

「本題？」

「そうです。我々元税務職員の共同提案です」

「あつ！ そうでした」

「政府はデフレ脱却のために第一の矢、第二の矢、第三の矢とか言っていますが、その第三の矢について提言があります」

「分かりました」

「ようやく逆田が落ち着きを取り戻す。

「まず、第三の矢の意味を復習しましょう」

「同じく平常心に戻った山本が説明を始める。

「金利政策や円安政策で輸出関連の大企業と一部の中小企業では大幅に収益が改善されました。その利益を従業員の基本スアツプにと言うのが第三の矢です。給料を増やして本格的なデフレ脱却を計って景気を浮揚させようという作戦です」

「ここで元副署長が発言する。」

「そうです。しかし、グローバル化した世界でそう簡単に企業は給料を増やすことはしません。利益はできるだけ留保したいはずです。政府がいくらお願いしても、利益をどう使うかは企業の自由です。もし強制すれば日本は社会主義国家になります」

これ以上発言されると自分の立場がないと言わんばかりに逆田が待ったを掛ける。

「政府は前年に比べて給料を増額すれば税金を安くするという方針を打ち出しましたね」

「この方策で大きなインセンティブを企業に与えることはできません。まずハードルが高く制度が複雑です。それにすでにかなり法人税率は低いし、その低い法人税率さえもつと下げるとまで言っています」

「そうだとすれば、給料を上げずに安い法人税を払ってでも資金を貯め込むでしょうね」

「そのとおりです。大震災やメルトダウンによる被害を受けた企業は必要以上に資金を留保するはず。ところで税金をまけるという消極的なやり方ではお金を吐き出させる効果は余りありません」

「と言いますと？」

「税務調査をしていますと、企業は税金を少なくするという特例より、税金を加算するという特例に敏感だと感じます」

「どういうことでしょうか？」

「国際的に高いというより、経営者は過去の法人税率と比べて十分低くなっていることを実感



しています。そうであればなおいつそう低くするという餌より、政府の意向に従わなければ一定の利益に高い税率を適用するという方が強いインセンティブを与えます」

「なるほど。ところで企業に給料を上げさせる妙案があるのですか」

「あります」

「えー！ それは？」

\*

「留保金課税です」

「留保金課税？」

「法律は生きていますのですが随分前に適用が停止されました。税務職員でも知っている人はもういないでしょう」

「どういう制度だったのですか」

「主に同族会社に適用された制度で、儲けても配当しないと通常の法人税率に上乗せして課税するのです」

「？」

元副署長の説明に誰もが疑問符で応える。

「同族会社の場合、利益が出てもほとんど配当しません。同族会社と言えば中小企業、いえ零細企業でしょう。資金力がありませんから儲けた金を借金の返済や預金に回そうとします」

全員が「ふんふん」と頷くが、山本だけが違った。

「株主は配当を欲しがらないのですか」

「それは欲しいでしょう」

立派な服の大家が続く。

「なぜ配当しないのじゃ。同族会社の場合、大概社長自身が株主じゃ」

「簡単に言うのと配当は経費にはなりません。配当しても利益の額は変わりません。配当というのは利益の分配なのです」

「利益すべてを配当に回しても税金はゼロにはならないということか」

「そうです。仮に利益、税法では課税所得と言いますが、それが100だとしましょう」

画面の中で元副署長が電子黒板に「100」と書きこむ。

「法人税率が20パーセントだとすると税金は20ですね」

元副署長の横にいる山本も逆田も電子黒板を見つめたままだ。

「この利益の半分を配当に回したとしましょう。でも法人税は20のままです。50配当しよう」と利益は100のまま。20の税金は納付しなければなりません」

田中が思わず声を出す。

「それでは資金は30しか残らない。配当しなければ80残るのに」

「それに配当を貰った人には所得税がかかるわ」

「国はその配当にかかる税金も欲しいのです」

「それは国の勝手だ」

「そうです。税務署の勝手ではありません」

間髪を入れず元副署長が言葉を挟む。

「政府に頼まれて大蔵省の職員が法律案を作成しますが、それを法律にするのは国会議員です。つまり選挙で選ばれた議員です」

すかさず山本が横槍を入れる。

「その話はあとでお聞きするとして……」

元副署長が山本を制する。

「始めに長々と公務員の人事について申し上げたのは訳あつてのことなのです」

山本は元副署長に身を乗りだすが逆田が止める。

「法律の原案を作るのはキャリア組ではありません。現場を知っているノン・キャリアが作ります」

「そう言えば記者会見で法案の中身について質問すると、局長ではなく年配の方が、それでもうまく答弁できなければ四十歳前後の方が対応していたわ」

「現場を知らなければ何もできません。私はそれを言いたかったのです。日本の法律の根本はノン・キャリアが支えています」

「それじゃ、ノン・キャリアの税務職員が税法を作っていることになるぞ」

質素な服の大家の迫力ある言葉が元副署長に向かう。

「そうではありません。少し誤解があったようです」

元副署長が一息入れると続ける。

「人事の話の中で採用試験によって将来が決まってしまうと言うお話しましたね」

「はい。その試験で事務次官にまで上り詰める人と出世しても署長にしかねない人に区別される」と

「ある事情で、たとえば学費が出せない恵まれない家庭で育った高校卒業生は上級試験を受けられません。そのような人は下級試験しか受けることができません。高卒でも本当に頭のいい人が現場で経験を積みばすごい才能を発揮するのです」

「よく分かりました。そういう元副署長もすごい才能をお持ちですね」

しかし、元副署長は反応することなく話を元に戻す。

「さて留保金課税ですが、配当の場合と違って、しかも同族会社や中小企業のことではなく、すべての企業に、儲けても給料を上げなければ追加の課税をするというのが、私の提言です」

「追加課税されるぐらいだったら、従業員に喜ばれる給料アップの道を選ぶでしょうね」

「しかも上げた給料は経費になりますから、そのぶん法人税も安くなる」

元副署長が電子黒板に書きこむ。

「先ほどの配当の場合と同じ数字で説明しましょう」

田中が代表して画面の元副署長に声をかける。

「今度は配当の代わりに給料を上げるのですね」

「そうです。まず100の利益。法人税率は20パーセント。このままでは税金は20です。

ここで給料を50余分に出すとします。利益は当然その分だけ減って50になります。そうすると税金は10に減ります」

「給料を上げなければ？」

「たとえば50上げるべき給料を上げずに、つまり留保したという前提で説明しましょう。この50にもう一度法人税率の20パーセントを課税するというペナルティーを課します」

「元々の20にプラス10。合計30。わあ！ 三倍にもなる」

「この20パーセントの追加課税の税率を、このケースで50のうち25については40パーセントにすればどうですか」

「25の40パーセントですから10。残りの25については20パーセントだから5。元々の税金が20ですから全部で35になりますね。給料を上げた場合の三・五倍か。ふー」

「ここで企業もやむを得ず25だけ給料を上げていたらどうでしょうか」

「利益は25減って75で、これに20パーセントかけると15ですね。それに給料に引き上げが25。つまり本来の引き上げ額の半分だから、25に……掛ける税率は40ではなく20

パーセントでいいのですね」

「そのとおりです。半分義務を果たしたと考えます」

「すると5だから、合計20。それでも給料を50上げた場合の二倍」  
「この留保金課税がない場合と同じ20です」

これまで黙っていた質素な服の大家が画面に向かって感想を漏らす。

「給料を50上げるのは無理でも25上げようとするだろう」

立派な服の大家が追従する。

「最低、高いペナルティーだけは避けようとするはずじゃ」

「そのとおりです。この給料に関する留保金課税は基本給の増加を対象とします。新入社員の  
場合はその年の基本給全額が対象です。要は一年前よりどれだけ月給が増えたかによってその  
増加がなかった場合と比べて課税する制度です。経営者は一年間の売り上げと経費を見越して、  
さらには将来をも見すえて給料の額を決める必要があります。あるいは新規採用も考えなければ  
なりません。もちろん赤字なら留保金課税される余地はありません」

「経営者は厳しい判断を強いられるな」

「経営者であれば当然で漫然とした経営はできません。中小企業といえどもグローバル化した  
世界経済の中で生き残るには、むしろ人材をどう生かすかという意味で、意外とこの留保金課  
税制度が後押しをするかもしれません」

山本が期待感を持って尋ねる。

「いつ、この留保金課税制度を提案されるのですか」

「明日ホームページで提案します。反応を待って政府には数日以内に直接提案するつもりです」  
「分かりました。私たちもその内容を検討して『なるほど』という感触を得れば大々的にキャンペーンを張りましょう」

「ありがとうございます。しかし……」

山本が首を傾げる。

「今の政府のやり方は体のいい独裁的なやり方です」

「と言いますと？」

「言葉は柔らかいですが『法人税はまけてやる。復興特別税も免除してやる。だから給料を上げろ』というのは独裁政治に近い」

「おっしゃるとおりですね。気が付いたら何でも『要請』という名の命令で政治を動かそうとすれば危険ですね」

「そうです。きつちりと法案を練りあげて国会で審議して法律を作る。そして法律で政策を実行する。それが法治国家というものです。今も政府のやり方はソフトに見えますが、本来のルールを逸脱しています」

ここで田中が頷きながらため息を漏らす。

「でも……この方法を採用すれば確かに給料は増えるんだろうな。でも是非はともかく社会保険料が滅茶苦茶増えるなあ」

「な、なるほど」



# 後書

この作品は2012年にホームページに掲載した長編小説「成程2」を改訂加筆したものです。いわゆる「成程1」の後編に当たります。他の拙著の作品と同様、パソコンやスマホでテキスト原稿やPDF原稿が読みにくいというお叱りを受けてKindle版の電子書籍として再発行したものです。

また、拙著「C・O・S・M・O・S」シリーズの下敷きになった「トリプル・テン」シリーズがありますが、その下地にもなっています。興味のある方は「C・O・S・M・O・S」や「トリプル・テン」もお読みいただければ幸いです。

さて、世にも不思議なテレビ。どこの放送局も真似できない報道を特殊なカメラで捉えては真実を明らかにしていきます。言うなれば近代版「水戸黄門」「遠山の金さん」がカメラを持って取材し放映しているようなものです。

黄門や金さんに代わって、ごくありふれた登場人物である田中、山本、大家、逆田が地味に活躍します。さて時代の変化に付いていけなくなりながらも、何とか連載を続けようと思いません。取り敢えず第4話に挑戦します。ご期待ください。

## 後書

奥付

「なるほど」 3

(第三編) 何がおかしいのだろう

2012年1月 初版 (PDF版) 発行

2020年6月 改訂版 (電子書籍版) 発行

著者 照 伝光

発行者 照 伝光

後書

(<https://www.cosmos123.com/>)